30 大文字五山の送り火

だいもんじござんのおくりび

知る

■どんな行事

毎年八月十六日の午後八時より約一時間、京都市内を囲む山の中腹に巨大な「大」（大文字山・左大文字山の二つ）「妙・法」の文字、船・鳥居の形が相前後して点火されます。これらは、総称して大文字五山の送り火と呼ばれています。

京都では八月に入ると個々の家で精霊（しょうりょう）（先祖）迎えの行事が行われます。十六日に行われる五山の送り火は、この精霊を再び冥土に送り帰すという意味をもっています。

一般に盆行事は古来七月に行われていましたが、明治六年（一八七三）の太陽暦採用にともない、地方によって行われる月はまちまちとなりました。京都では「勝手に変えたらご先祖さんが困らはる」からと旧暦七月にほぼ相当する一カ月後の八月に行っています。

また、送り火の消炭（けしずみ）は疫病除け・魔除けになると伝えられており、盆やコップに注いだ水に送り火の灯りを映して飲めば、中風にかからないという言い伝えもあります。

現在、点火の儀式や薪の管理などは、各山麓の町の人々が保存会を結成して維持しており、この五山の送り火は、それぞれが京都市無形民俗文化財に登録されています。

なお、この京都の行事にならって、神奈川県箱根町強羅（ごうら）では「大文字焼祭り」が八月十六日に行われており、高知県中村市間崎でも「大文字送り火」が行われています。

■送り火のはじまり

五山の送り火のはじまりについては、あまり明らかになってませんが、一説には、戦国時代に盛んに行われた万灯会（まんとうえ）が、次第に山腹に点火され、盂蘭盆会（うらぼんえ）の大規模な精霊送りの火となったのが起源といわれています。文献において、もっとも古いものは、舟橋秀賢（ふなはしひでかた）の日記『慶長日件録』慶長八（一六〇三）年七月十六日の条に見られる「晩に及び冷泉亭に行く、山々灯を焼く、見物に東河原に出でおわんぬ」という記載です。具体的な名称があらわれるのは、寛文二（一六六二）年に刊行された中川喜雲（きうん）の『案内者（あんないしゃ）』で、ここには「妙・法」「船形」「大文字」の記載が見られ、寛文五（一六六五）年に刊行された『日次紀事』には、「鳥居形」や「左大文字」が点火された記事が載っています。

大文字の送り火（『東山名勝図会』巻四）

ちなみに五山以外では、江戸後期、「い」（市原野）、「一」（鳴滝）、「竹の先に鈴」（西山）、「蛇」（北嵯峨）、「長刀」（観空寺村）も点火されていましたが、今では廃絶しています。

(c)2005 京都市（制作 京都市歴史資料館） ver.1.05

■送り火の点火方法

大文字送り火　「大」の文字の筆者には空海、あるいは相国寺(現上京区)の僧横川景三(一四二九～九三)の指導で足利義政家臣の芳賀掃部が設計したなどの各説があり、『案内者』は近衛信尹(一五六五～一六一四)説を主張しています。江戸初期では、杭を打って火床をつくり、その杭に松明を結びつけていましたが、寛文・延宝(一六六一～八一)の頃より現行の積木法にかわりました。現在では、山の斜面に土盛りをし、大谷石を設置、その上に薪を井桁に組んで積み重ね(約一・三メートル)、その間に松葉を入れ、火床をつくっています。火床は七十五基、大の字の一画目の長さ八十メートル、二画目百六十メートル、三画目百二十メートル、「大」の中心を金尾と称して、特別大きく割木を組んで点火します。

(上)空海を祀った弘法大師堂と金尾

(左)金尾の全景

松ヶ崎妙法送り火　「妙・法」の字は、涌泉寺(松ヶ崎堀町)の寺伝によると、徳治二(一三〇七)年松ヶ崎の村民が、日蓮の法孫である日像に帰依し、法華宗に改宗、その時、日像が西山に「妙」の字を書き、下鴨大妙寺の日良が東山に「法」を書いたと伝えられています。江戸時代の中頃には、杭の上に松明を結んで点火したり、掘った穴に石を置いて火床がつくられていました。現在は、鉄製の受皿火床に割木を井桁状にして積み上げ点火されています。「妙」の火床は百三基で縦横の最長は約百メートル、「法」の火床は六十三基で縦横の最長は約七十メートルです。

船形万灯籠送り火　「船形」の舳先は西方浄土を指していると言われ、精霊船の意もこめられていると伝えられています。かつては割木を大松明の形に束ねて燃やしていましたが、現在、火床は山の斜面に石組をし大谷石を設置、その上に薪を井桁に組むやり方に変わっています。火床は七十九基、横約二百メートル、帆柱の高さ約九十メートルです。

左大文字送り火　この山は、岩石が多くて火床が掘り難いところから、以前は篝火を燃やしていましたが、現在は山の斜面に栗石をコンクリートでかためた火床(三十センチ～三メートル)に松割木を井桁に約一メートル重ねます。火床五十三基、一画四十八メートル、二画六十八メートル、三画五十九メートルです。

鳥居形松明送り火　以前は、親火より松明に火を灯して、各火床である青竹に突き刺していましたが、現在では、鉄製受皿が各火床に設置され、その尖った芯に松明を突き刺して点火しています。火床百八基、鳥居の笠貫が約七十メートル、左右の脚は約八十メートルです。

■八月十六日以外の送り火点火

大文字五山の送り火は、明治時代にはいると、古都を代表する行事として注目され、慶祝行事などの一環で点火されることがありました。左はその一例です。

・明治二十三(一八九〇)年 四月八日
　琵琶湖疏水竣工祝賀夜会…大文字山点火
・明治二十四(一八九一)年 五月九日

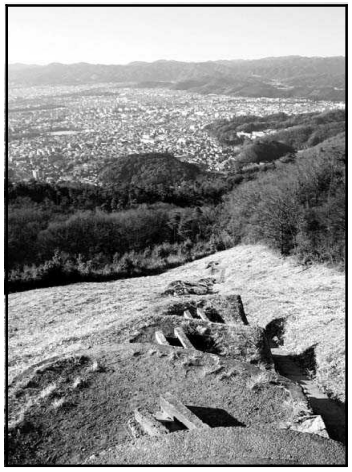
(c)2005 京都市(制作 京都市歴史資料館) ver.1.05

ロシア皇太子入洛…全山点火
・明治二十八(一八九五)年 五月十五日
日清戦争後、明治天皇の京都訪問
…大文字山で「祝平和」の文字点火
・明治三十一(一八九八)年 十月二十七日
皇太子嘉仁親王(大正天皇)京都滞在…大文字点火
・明治三十八(一九〇五)年 六月一日
日露戦争祝勝…旧制三高生による大文字点火
・昭和十(一九三五)年 四月三日
室戸台風襲来(昭和九年九月二十一日)
…倒れた樹木を弔うため大文字点火
・平成十二(二〇〇〇)年 十二月三十一日
21世紀京都幕開け記念…全山点火

歩く／見る

■大文字山　左京区浄土寺七廻り町

標高四百六十六メートル。「大文字送り火」は銀閣寺近辺の旧浄土寺村の人々が大文字保存会を組織し維持しています。


大文字山の火床

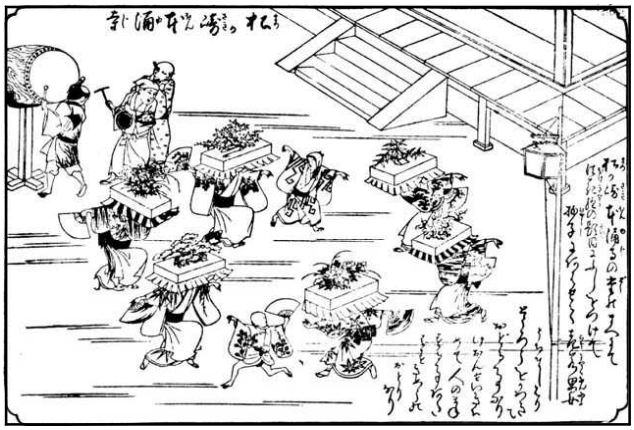
保存会では、八月十五日より銀閣寺山門の前で、一般市民から、先祖の供養や現存する人々の利益を願う護摩木を当日十六日の午前中まで受け付け、集められた護摩木は、送り火の点火材料として山上にある火床へ上げられます。

午後七時になると、金尾の部分にある弘法大師堂に灯明がともされ、大文字寺と呼ばれる麓の浄土院の住職と保存会員によって般若心経が唱えられます。その後、午後八時になると、竹に麦わらを結びつけ、松葉を先につけた松明で灯明の火を金尾にある親火にうつし、合図によって一斉に点火されます。

また、この旧浄土寺村では、江戸時代に送り火に合わせて念仏踊が行われていました。この送り火は、荒神橋から御薗橋までの賀茂川(鴨川)河岸でよく見えます。

■妙法山　左京区松ヶ崎西山・東山

西山は標高百三十三メートル、東山は標高百八十七メートル。「松ヶ崎妙法送り火」は、松ヶ崎妙法保存会によって維持されており、地元で法華宗(日蓮宗)の信仰が非常に強いと言うことと密接な関係があります。前日の十五日に薪が火床に上げられ、当日の十六日午後八時十分に点火されます。この点火の際、「妙」の山では、松ヶ崎堀町にある涌泉寺の住職や松ヶ崎立正会会長らが読経し祖霊を送ります。


松ヶ崎題目踊（『宝永花洛細見図』巻四）

また、涌泉寺では、送り火が消えた午後九時ごろから、境内で題目踊が催され

(c)2005 京都市(制作 京都市歴史資料館) ver.1.05

ます。この題目踊は、村民が法華宗に改宗した折に歓喜踊躍して太鼓を打ち、法華の題目を唱えたのに始まるといわれており、現在では、輪になった男女が音頭取りの太鼓の合図で「南無妙法蓮華経」を繰り返しながら、団扇を上下に回転させ、体を屈伸しながら踊るもので、送り火前日の夜にも行われています。この送り火がよく見える場所は、北山通の地下鉄松ヶ崎駅付近です。

■船山　北区西賀茂

標高は三百十七メートル。「船形万灯籠送り火」は、麓にある西方寺(浄土宗)と船形万灯籠保存会が中心に維持されています。

この「船形」は、西方寺開山の慈覚大師円仁が、承和六(八三九)年、唐からの帰路、暴風雨に遭い、南無阿弥陀仏と名号を唱えたところ無事おさまったという故事にちなむと伝えられています。

「大文字送り火」同様に、八月五日から十五日まで、西方寺で護摩木の受け付けを行っており、当日は午後八時十五分点火され、その後、境内では六斎念仏が行われます。

六斎念仏は、鉦や太鼓を打って囃し、念仏を唱えながら踊る民俗芸能です。西方寺の六斎念仏は、左京区にある干菜寺の六斎念仏の系統で、本来の踊り念仏の型を比較的保っているといわれています。六斎念仏は、お盆の行事として各所で行われています。この送り火は、北山通の北山大橋からよく見えます。

■左大文字山　北区大北山

標高は二百三十一メートル。「左大文字送り火」は、左大文字保存会によって行事が維持されており、送り火当日とその前日には、金閣寺境内に張られたテントで、護摩木の受け付けを行っています。

当日の午前中に、北区衣笠街道町にある法音寺(浄土宗)の本堂の灯明の火によって、当寺にある親火台(鉄製で蓮華を模して作られた台)への点火が行われます。一方、若い会員を中心に薪や護摩木は山上に上げられ、暗くなる頃には、法音寺住職の読経があり、大松明に親火から火が移されます。午後七時にはこの大松明を中心に行列を作り火床を目指します。点火時間は午後八時十五分で、大文字が一斉点火なのに対して、左は筆順通りに火を付けるのが特徴です。この送り火は、西大路通沿いの金閣寺付近でよく見えます。

■曼荼羅山　右京区嵯峨鳥居本

標高は約百メートル。この山は別に水尾山と呼ばれ、「鳥居形松明送り火」は、松明で燃やしているため、保存会の名も鳥居形松明保存会と称しています。

昔は特に宗教的行事は伴わなかったのですが、現在では他の送り火と同様に、八月十三日から十六日まで、化野念仏寺の駐車場にて護摩木の受け付けを行っています。これら護摩木は、化野念仏寺において供養された後、山上へと運ばれ、送り火は午後八時二十分に点火されます。

この送り火は、他のものとは異なり、親火より火を移した松明を持って一斉に走り、各火床に突き立てます。そのため鳥居の柱に当たる火床は縦の走りとよばれ、ベテランの担当する部署であり、笠木と貫の部分は横の走りといい、若い人が担当します。この送り火がよく見える場所は、松尾橋や広沢池などです。

(c)2005 京都市(制作 京都市歴史資料館) ver.1.05